

令和 6 年 5 月 31 日現在

機関番号：32675

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K01789

研究課題名（和文）富岡製糸場における女性労働環境の変容に関する史的研究

研究課題名（英文）Historical Study on the Transformation of Women's Working Environment at Tomioka Silk Mill

研究代表者

榎 一江（Enoki, Kazue）

法政大学・大原社会問題研究所・教授

研究者番号：90466813

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、製糸業を通して、女性の労働と近代日本の経済発展の相互関係を明らかにするものである。1872年から1987年まで操業した富岡製糸場における政府の支配、資本所有、ジェンダー化された労働条件の変遷を探ることで、グローバルヒストリーにおける新潮流のなかで、女性の労働環境を再評価した。富岡製糸場に関係した女性たちの労働生活をたどることは、世界的な絹産業が生み出した国際的なつながりだけでなく、近代日本の資本主義の発展と労働政策の歴史的な転換をも示していると言える。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、国際的な労働史研究の新潮流を踏まえ、日本の女性労働史を再検討するものである。具体的には、近代日本の経済発展を底辺で支えた製糸業に焦点を当て、多くの女性労働者を雇用し続けた製糸工場の代表的存在である富岡製糸場の事例から、女性労働環境の歴史的変遷を明らかにした。

これは、「女性活躍」が求められる現在、女性の働き方がどのように変遷してきたのかを正しく理解することにつながるものといえよう。

研究成果の概要（英文）：This research depicts the intertwined histories of women's labor and the economic development of modern Japan through the lens of the silk reeling industry. By exploring the shifts in governmental control, capital ownership, and gendered working conditions at the Tomioka Silk Mill (in operation from 1872 to 1987), I reevaluate women's industrial working environments within broader trends in scholarship on global history. Tracing the working lives of women connected to this mill demonstrates not only the international connections created by the global silk industry, but also the development of modern Japanese capitalism and historical shifts in labor policies.

研究分野：労働史

キーワード：女性労働 製糸業 富岡製糸場

## 1. 研究開始当初の背景

女性労働をめぐるのは、近年、その働き方に関心が集まっている。政府は「一億総活躍社会」の実現に向けた「働き方改革」を推進し、女性を労働市場に動員しようと労働環境の整備に着手し、「女性活躍推進法」も制定された。しかしながら、女性就業率の上昇にもかかわらず、その多くが非正規雇用に従事し、賃金水準が低位にあるなど問題も多い。育児や介護を含む家事と仕事との両立は容易ではなく、ワーク・ライフ・バランスの実現が現代の社会問題となっている。こうした現代的課題に対して、そもそも、女性の働き方はどのように変遷してきたのかを正しく理解することが必要であろう。本研究は、明治以来の日本の女性の働き方を一つの経営に焦点を当て実証的に分析することによって、この課題に取り組む。

## 2. 研究の目的

本研究は、国際的な労働史研究の新潮流を踏まえ、近代日本の女性労働史を再検討する。具体的には、近代日本の経済発展を底辺で支えた製糸業に焦点を当て、多くの女性労働者を雇用し続けた製糸工場の経営資料を長期にわたり分析することを通して、女性労働環境の歴史の変遷を明らかにする。対象となるのは、1872年に官営模範工場として開業した富岡製糸場である。富岡製糸場は、民間に払い下げられたのちも存続し、1987年に操業を停止した。この115年におよぶ労働環境の変遷を実証的に明らかにし、女性労働環境の変容に関する考察を深めることによって、日本の製糸労働史をグローバル・レイバー・ヒストリーに位置付けることを目指す。

## 3. 研究の方法

本研究の特徴は、富岡製糸場の女性労働環境について、「長期的な分析」を「国際的な視野」で行うことにある。

115年にわたる富岡製糸場の経営は、大きく官営期(1872年～92年)、三井・原期(1893～1938年)、片倉期(1939～87年)に分けられる。富岡製糸場は、操業停止後も片倉工業の管理下にあったが、現在は富岡市に移管され、2014年には「富岡製糸場と絹産業遺産群」が世界遺産に登録された。そのため、富岡市が保管する各時代の経営資料を利用して分析を行ったが、比較的研究蓄積のある官営期に対して、研究のない片倉期に関する分析を集中的に行うことで、女性労働環境の長期的な変遷を明らかにした。なお、本研究の遂行に当たっては、富岡市の協力のもと、資料調査を行った。とりわけ、片倉工業株式会社所蔵の寄託資料および個人情報を伴う内部資料の取り扱いについては細心の注意を払い、研究成果を発表する際は、あらかじめその概要を報告して許可を得た。

本研究はまた、国際的視野を重視する点に特徴がある。フランスを中心とする欧州の製糸技術を導入し、輸出糸を生産した日本製糸業は国際競争力を有していたのであり、その労働環境は国際的な視野によって検討されなければならない。本研究は、技術導入と欧州製糸業、労働時間規制とILO、アメリカ市場における価格競争といった国際関係に留意して日本製糸業における女性労働環境の変遷を明らかにし、家父長制的な規範の強い国で繊維産業に従事する女性の労働が自身の自立を促す過程でもあったことを明らかにした。

## 4. 研究成果

(1) 1年目は、文献収集とすでに収集した資料の整理・分析を行った。

文献収集に関しては、本研究をグローバル・レイバー・ヒストリーに位置付けるため、海外の労働史関係文献を、他産業との比較も視野に入れ、広く収集した。とくに、日系移民における女性労働の役割を参照することによって、日本の女性労働の歴史に関する知見を深めることができた。

すでに収集した資料の分析については、明治期の群馬県蚕糸業における富岡製糸場の位置を明確化する作業を行った。広範な座繰製糸の展開が見られた当該地域においては、多くの製糸工女が必要とされ、製糸業に従事する女性も多かったことを確認したうえで、その働き方、とりわけ労働時間と年間操業日数に着目した。季節産業としての制約があった当時の製糸業にあって、富岡製糸場の画期性は年間を通じて操業した点にあり、女性労働者にとっては一定の労働時間で年間を通して働くという工場労働の画期性を有していたことを確認した。

また、富岡市教育委員会の聞き取りから、各時代の女性労働環境の変遷を素描する作業を行った。創業期の伝習工女の姿はよく知られているが、民営化後の通勤工女の存在や、戦時期に女子挺身隊として働いた工女たちについてはあまり議論されていない。戦後の自動機導入に際しては交代制勤務も見られ、採用の中卒から高卒への切り替えも実施された。100年を超える長期間にわたって、女性労働環境の変遷を社会の変容とともにとらえる本研究の意義を確認できた。

(2) 2年目は、寄宿舎制度に焦点をあて、近年発見された「寮管理日誌」の分析を行った。

官営富岡製糸場は1872年の開業時に寄宿舎を用意したが、これは、日本における近代的な工場附属寄宿舎の嚆矢とされる。この寄宿舎は増築・新築されながら利用され続け、第二次世界大戦後も寄宿舎制度が存続した。この長い歴史を持つ工場寄宿舎での生活を再構成する試みの一つとして、1968年の寄宿舎生活を分析した。

まず、世界的に見れば、工業化初期に大規模な織物工場や紡績工場で寄宿舎を設ける事例は珍しくないものの、日本ではそれが第二次世界大戦後も重要な意味を持ち続けた点に特徴があることを指摘した。戦後の工場寄宿舎については、一定の法的規制と「寄宿舎の自治」を前提として運営されたことは周知であるが、その内実はあまり知られていない。そのため本研究は「寮管理日誌」の分析を通して、1960年代の工場寄宿舎での生活実態を明らかにした。その結果、工場寄宿舎に暮らす女性たちが工場で生糸生産に従事する労働者であると同時に、地域の商店や自社製品の重要な顧客となっていた点を指摘し、彼女らが高度成長期の消費生活を享受しており、少なくとも、自身が稼いだ収入を自分の意志で処理することが可能であったことを確認した。このことは、寄宿舎制度のあり方が長期的に大きく変容を遂げていたことを示し、拘禁性を寄宿舎制度の本質とみる先行研究に見直しを迫るものと言える。

(3) 3年目は、日本資本主義と女性労働をめぐる議論を整理したうえで、欧米で興隆したジェンダーの歴史学が描く工業化と女性労働をめぐる議論が、日本にそのまま当てはまらないことを確認したうえで、雇用労働市場において女性や子どもの使用が制限される世界的な潮流の中で、農村出身の未婚の女性が日本の経済発展を底辺で支えていたことを日本の工業化の特徴とするジャンネット・ハンターの議論を援用しつつ、近代日本の女性労働をめぐる論点を抽出した。その特徴は、第一次大戦後の労働市場の変容と改正工場法の施行というインパクトを重視する点にある。具体的には、改正工場法が女子労働者保護を進めた反面、女子労働者の解雇・賃金低下等をもたらし、それが現在へと続く女子労働者の地位の不安定性につながったという見解である。これが主に言説分析によって規範やイデオロギーのレベルで主張されたのに対し、本研究は、実際の生産現場でどのような変化が見られたのかを富岡製糸場の事例から考察した。

その結果、富岡製糸場が高い生産能力を維持しながらも、女子労働者に対する教育・衛生施策を後退させていた可能性を確認した。改正工場法や健康保険法の施行によって女子労働者を雇用するコストが増大するなかで、製糸業の機械化ともいべき多糸機の導入が進んだものの、寄宿舎等への投資ができていなかったのである。そのため、富岡製糸場は、その経営を片倉製糸に委ねざるを得なかったのではないかとこの着想を得た。

(4) 4年目は、富岡製糸場開業150年にあたり、富岡製糸場世界遺産伝道師協会総会(6月18日、前橋市)、富岡製糸場開業150年記念シンポジウム(10月2日、富岡市)において、100年を超えて稼働した富岡製糸場を事例に女性労働史研究を行う意義について報告を行った。また、世界経済史会議(WEHC2022、7月29日、パリ)においては、パネル(Silk: trade, production and skill in an Eurasian perspective from the Seventeenth to the mid Twentieth century)で報告し、富岡製糸場を事例に近代日本の工業化における女性労働の意義について再考を促した。

また、創立期の官営富岡製糸場の女性労働をめぐる、日本資本主義論争における女性の不在を論じた『『女性』の不在と『惨苦の茅屋』 - 嵌入する外部』を法政大学大原社会問題研究所/長原豊+ギャヴィン・ウォーカー編著『「論争」の文体 - 日本資本主義と統治装置』法政大学出版局、2023年に寄稿した。

(5) 5年目は、11月にリヨンで開催されたワークショップ(Workshop Weaving the World with Silk. Trade, Production, Skills and Gender in a Global Perspective from the Sixteenth to the mid Twentieth century)に参加した。編者との最終的な打ち合わせを経て、シルクのグローバルヒストリーに関する論集(A Global History of Silk: Production and Trade, 16th-20th Centuries)に論文を提出することができた。これは、2024年に刊行される予定である。

ここでは、1872年に官営模範工場として開業し、民間に払い下げられたのちも1987年まで操業を続けた富岡製糸場の事例をもとに、日本製糸業における女性労働の展開をグローバルヒストリーに位置付ける試みを行った。これは、研究期間全体を通じて検討してきた富岡製糸場における女性労働環境の変容を従来とは異なる視点でまとめたものであり、その成果を海外に向けて発信することができたと言えよう。また、3月末には、福井県勝山市で「近代日本の蚕糸業」と題する講演を行い、羽二重生産で有名な福井県における蚕糸業の展開について検討する機会を得た。研究期間全体を通じて富岡製糸場の事例からシルクのグローバルな展開について考察を深めてきたが、改めて地域の蚕糸業史を再考する視点を得ることができた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 榎一江	4. 巻 89 3
2. 論文標題 「日本資本主義と女性労働 富岡製糸場の事例から」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 『経済志林』	6. 最初と最後の頁 47-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 榎一江	4. 巻 62-5・6
2. 論文標題 1968年の工場寄宿舎	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 商学論纂	6. 最初と最後の頁 143,178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件／うち国際学会 1件）

1. 発表者名 ENOKI Kazue	
2. 発表標題 Japanese Capitalism and Women's Labor: The Case of the Tomioka Silk Mill, 1872-1987	
3. 学会等名 The World Economic History Congresses (WEHC)（国際学会）	
4. 発表年 2022年	

〔図書〕 計1件

1. 著者名 法政大学大原社会問題研究所、長原 豊、ギャヴィン・ウォーカー	4. 発行年 2023年
2. 出版社 法政大学出版局	5. 総ページ数 430
3. 書名 「論争」の文体	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------